令和6年度　鹿児島市小･中連携研修会(甲南中グループ)研究のまとめ

鹿児島市立中洲小学校

１　グループ研修主題

生きる力を育む小・中連携の在り方について
～「学習指導」「生徒指導」「特別支援教育」連携の観点から～

２　主題設定の理由

変化の激しい社会を担う子どもたちに必要な「生きる力」を育むため，確かな学力，豊かな心，健やかな体の育成が学校教育に求められている。

また，授業の質的改善やＬＤ・ＡＤＨＤ等，学習に集中することが難しい児童・生徒への指導上の課題もある。さらに，いじめや不登校等，　生徒指導上の課題も発生してきている。

そこで，同じ地域に生活する児童・生徒の健全育成や学力向上を目指し，小・中学校間で情報交換をしながら，連携して指導に当たっていくことは有意義であると考えたため，このように主題を設定した。

３　研究の視点

（１）　学習指導の充実を図る。
　①　学力の二極化の解消に向けた指導の充実
　②　主体的な学びの習慣化を図る指導の充実

（２）　生徒指導の充実を図る。
　①　心の教育の推進を図る取組
　②　配慮が必要な児童・生徒への指導・支援

（３）　特別支援教育の充実を図る。
　①　個に応じた指導・支援
　②　就学指導における共通理解

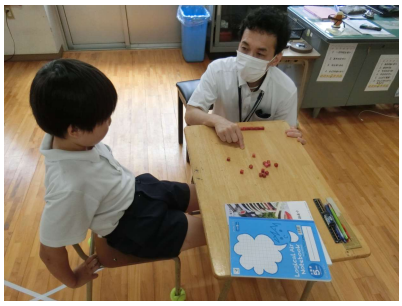
４　研究の実際

（１）　実施日時　令和６年６月24日（月）　14：05～16：35（受付13：50～）
（２）　会 場 校　鹿児島市立中洲小学校
（３）　参 加 校　鹿児島市立甲南中学校，鹿児島市立荒田小学校
（４）　日　　程

13:50　14:05　14:50　15:05　16:05　16:15　16:25

受付	授業参観	移動 休憩	分科会	指導･助言	アンケート

（５）　授業参観の様子



全学級で授業を公開した。「学力の二極化の解消」「主体的な学びの習慣化」を図る指導が授業の中で見られるように準備を進めた。

「学力の二極化の解消」については，教え合い，学び合いの場の確保，個別指導の充実，ＩＣＴ機器の有効活用を中心に参観してもらった。教え合い，学び合いについては，自力解決で自分の考えや疑問を明らかにし，協働解決で友達の考えに触れ，見方・考え方を広げたり，解決のヒントを得たりすることができるようにした。個別指導の充実については，机間指導やノート，プリントの取組を通して，つまずきが見られる児童を把握し，適切な指導助言を行うようようにした。

「主体的な学びの習慣化」については，発見や負荷といった要素を含む発問や資料提示を工夫し，主体的な問いをもたせるようにした。終末ではラスト10分の時間を確実に確保し，練習問題等での見届けやわ（分かったこと）が（頑張ったこと）と（友達から学んだこと）も（もっとできるようになりたいこと）の観点をもとに学びの振り返りを行うようにした。

（６）　研究の視点における各学校の取組

	甲南中	荒田小	中洲小
学習指導	○　学力の二極化の解消に向けて ・　学習形態の工夫（個で考え取り組む場面，ペアで思考を深める場面，グループでの対話を通して学びを深める場面の設定） ・　支援員の先生との連携 ・　英語科３年生での習熟度別少人数指導 ○　主体的な学びの習慣化を図るために ・　「甲南中実践五項目」 （一、あいさつは，甲南中の誇り。 一、授業前はチャイム前に着席・黙想。 一、給食時間は，４校時終了後１０分以内着席。 一、清掃時は無言。 一、集会は５分前集合で無言整列。）を徹底する。 ・　「３つの達人」（聞き方の達人・話し方の達人・反応の達人）を徹底し，発表しやすい雰囲気を作る。	○　学力の二極化の解消に向けて ・　算数の少人数指導（習熟度別），レディネステストの活用 ・　タブレットの活用（デジタルドリル等）…個に応じた課題 ・　個別指導（授業時間で個別指導の時間を設定する） ・　ペア・クループ学習による教え合い ・　児童のつまずきを学年で共有 ・　中学校のテスト期間に合わせ，小学校も家庭学習強調期間を設定する。 ○　主体的な学びの習慣化を図るために ・　自学ノート（よい学びの称賛） ・　個に応じた課題の与え方の工夫 ・　２分前着席，１分前黙想 ・　タブレットの活用（デジタルドリル等）…個に応じた課題	○　学力の二極化の解消に向けて ・　重点指導単元の設定と指導の工夫（学力検査結果を踏まえて） ・　学び合いの場においては，できない，分からない子から先に発表し，できる，分かる子が説明を行うようにする。（リトルティチャーの活用） ・　終末の時間の確かめにおいて，適用問題やポストテストを実施し，本時の学習内容の理解度の見取りを確実に行う。理解が不十分な子には，個別指導を通して，補充，補完を行う。 ・　算数においては，算数専科を活用し，習熟度別の学習形態を取り入れていく。 ・　デジタルスキルドリル（navima）の機能を有効活用し，反復や確認を通して，課題解消に努めていく。 ○　主体的な学びの習慣化を図るために ・　主体的な問いを促す導入のあり方について研究実践を図る。（発見，比較，負荷，活用，日常生活との関連を図るもの，既習とのずれを生ずるもの等） ・　ラスト10分の確保を確実に行い，ふり返りを通して，自己の学びを見つめ，調整し，実践する習慣化を図る。（学び見つめるもう一人の自分の育成） ・　考えの筋道を示す言葉を使った説明やまとめ，図や数直線などを活用しながら考えを視覚化する，「事実」「主張」

			「理由」をセットにした考えの構築（三角ロジック）等の学びの構えの定着
生徒指導	○　心の教育の充実を図るために ・　校則のすり合わせ（中１ギャップをなくすため） 例：靴下，靴，体育館シューズなど ・　褒める指導（グリーンカード）の啓発 ・　語先語礼，門礼 ○　配慮が必要な児童・生徒への指導・支援について ・　児童生徒の共通理解，情報共有 学校での対応，兄弟関係，家庭環境等 ・　各校の具体的な取組の紹介	○　心の教育の充実を図るために ・　道徳教育の充実 ・　キラキラ星（友達のよいところを探す）の掲示※ボランティア委員会 ・　いじめアンケート（毎月），学校たのしーとの活用（年2回） ・　お互いを認め合う場の設定（授業や朝の 会，帰りの会等） ・　毎月２３日を親子読書の日と定め，読書カードを配布し，家族ぐるみで読書をしていただく機会を設定している。 ○　配慮が必要な児童・生徒への指導・支援について ・　特別支援コーディネーター，保護者，支援員との連携 ・　生徒指導事例研修会（全職員で共通理解を図る） ・　保護者と関係機関をつなぐ努力 ・　該当児童を取り巻く環境の把握 ・　保護者への連絡を密に（早めの連絡と対応）	○　心の教育の充実を図るために ・　道徳科教育の充実 内面の自覚化を図る手だて，道徳科の授業での気付き，学びを生かす事後活動（道徳的実践力の場の設定） ・　心のコーナーの設置 ・　帰りの会におけるいいこと紹介，給食時間におけるキラリ紹介 ・　中洲のあろは（あいさつ，廊下歩行，履物そろえ）の日常的実践と習慣化 ・　ふわふわ言葉の励行といじめ０の取組（しない，させない，見逃さない） ○　配慮が必要な児童・生徒への指導・支援について ・　家庭との連携を密に行う。特に不登校傾向にある児童については，お迎えや個別相談などを通して，解消に努めている。 ・　外部機関の協力を得ながら問題解消における適切な対応を進める。 ・　自己肯定感を高めたり，自信を醸成したりする場を設定する。 （コンクール応募，新聞投稿など） ・　学級における居場所や役割の確保（やりがいや達成感，満足感を得る場の工夫）
特別支援教育	○　個に応じた指導・支援について ○　支援の必要な生徒の周知，共通理解を行った。職員会議，校内特別支援推進委など ○　通常学級における特別支援教育支援員の活用（１日５時間×週２日） ▲　教材や成績等の情報交換を密に（日々の学習内容等を共有する方法を検討中） ○　就学指導における共通理解 ○　前年度末に現状，進路希望を聞き取り引継ぎを行った。 ▲　家庭訪問や教育相談で進路確認を行った。進路に応じた支援の在り方を検討中。 課題 ▲　中学の教科担任制による支援学級時間割の複雑さ ▲　教科指導について継続指導がやりづらい。 ▲　教室飛び出しへの対応（空き教員がいない） ▲　進路・入試への対応（入試を受ける場合，５段階評定などが必要となる）	○　個に応じた指導・支援について ・　特別支援コーディネーター，保護者，支援員との連携 ・　特別支援教育事例研修会（全職員で共通理解を図る） ・　タブレットの活用（デジタルドリル等）…個に応じた課題 ・　座席の配慮 ・　特別支援教育の研修会へ参加し，学んだことを学校全体で共有する。 ○　就学指導における共通理解 ・　特別支援教育事例研修会で積極的に事例を挙げ，全職員で共通理解を図る。（全職員で共通認識のもと，指導にあたる）保護者にもふれあいトーク（教育相談）などで働きかけ，就学指導を進めていく。	○　個に応じた指導・支援について ・　児童が抱える困り感と適切な対応について全職員で共通理解を図る場の設定 （職員会議，特別支援校内委員会，連絡会を中心に） ・　困り感を抱える児童への適切な支援についての研修 （声掛け，クールダウンする上での効果的対処，学習支援の工夫等） ・　自立活動の充実（学習内容等） ・　甲南中校区合同活動の確認 ○　就学指導における共通理解 ・　学校，保護者，関係機関の三者連携による，より適切な就学指導の進め方（専門的な視野の活用） ・　幼保小，小中における接続時の就学指導における共通理解

研修会前に学習指導，生徒指導，特別支援教育の３つにおける視点を基にした各校の実態についてレポートにまとめてもらい，それを集約したものを配布し，共通理解を図った。

これにより授業参観での視点がより明確になったり，分科会の話し合いの活性化に繋がったりすると考えた。

（7）　分科会報告

A分科会…学習指導	①　学力の二極化の解消に向けた指導の充実について ・　定着の悪い単元を重点指導項目に位置づけ，指導法の改善・工夫に努める。（習熟の程度に応じた指導形態の導入，デジタル機器の有効活用等） ・　子ども同士の学び合いの場の充実を図る。自力解決⇒協働解決の繋がりを大切にする。分からない子が分かる子に質問すると言ったリトルティチャーの活用を推進する。個別指導の場でより多くの子供の困り感の解消にも繋がる。 ・　子どものつまずきは，どこにあるのか指導者がしっかりと把握した上で指導に当たる。（どこで，何に，どうしてという観点で） ・　複数の教員での指導体制の構築。（時間割の工夫等を通して） ②　主体的な学びの習慣化を図る指導について ・　授業において，子どもの主体的な問いを促す導入のあり方を大切にする。学習者である子ども自身が能動的な姿勢で学びに参加するためには，発見，比較，負荷，活用の要素を含む発問や資料提示が必要であると考える。問題意識がないと，自ら調べたり，考えたりしない。学力の低下にも繋がる。 ・　自分の課題を自分で自覚することが大切。つまずく原因，どこからが分からない等の実態把握等ができないと，解決への一歩が踏み出せない。教師からの支援が一方的にならず，子どもが自ら感じる困り感をもとに支援を求めることが大切。 ・　ふり返りによる非認知能力の向上を図る。学習している自分を客観的に見る自分を作る。 ・　学びの構えの構築を日常的に進める。（甲南中実践五項目，３つの達人） ○　共通実践事項として ・　家庭学習強調週間の設定（中学校のテスト期間に合わせて） ・　２分前着席と１分前黙想の徹底（各校全学級で実施） ○　指導助言…甲南中　岩脇　勝広　校長 ・　個別最適な学びには，「指導の個別化」と「学習の個性化」の２つの項目がある。 指導の個別化＝多様な学習機会の柔軟な対応，学習の個性化＝自らに最適な学びの調整のことである。 ・　学習意欲の向上のためには，動機づけが大切であること。 ・　ローマ字がヘボン式になるなど，指導内容の確認はできているか。 ・　中学校区で共通実践事項が図られ，有意義であった。
B分科会…生徒指導	①　心の教育の推進を図る取組について ・　道徳の授業を中核とした心の教育の充実を図る。道徳の時間での気付き，学びを実生活に生かす。（道徳的実践力を育む） ・　子どもを褒める，認める場の確保に努める。日常的な観察をもとに頑張りや善行の発見を行い，それを周囲に紹介することで，正しく，美しい行動の輪が広がる。褒められた子も自信がつく。 ・　相手の気持ちや立場に立った言動が身につくように指導する。（ふわふわ言葉の励行，いじめはしない，させない，見逃さないの徹底） ・　心を磨く活動の推進（中洲小：あいさつ，廊下歩行，履物そろえ，荒田小：あいさつ，履物そろえ，早寝早起き，甲南中：語先後礼，門礼） ②　配慮が必要な児童・生徒への指導・支援 ・　いじめについては軽微なものを見逃さない，早期発見，チーム体制で臨み，重大事案に発展させない。いじめの芽を摘む(未然防止)に努める。 ・　不登校については，粘り強く声掛けを行う。家庭との連携を切らない。 ・　学校での居場所，活躍の場を設け，自己肯定感の高揚，自信の醸成に努める。 ③　その他 ・　生徒指導の充実においては，チーム体制で当たることが不可欠である。中学校区間でも職員間の連携を図る機会が増えるとよい。特に小中の円滑な接続においては大切である。情報交換，意見交換の場が欲しい。 ・　小学校での指導をベースにし，その指導が中学校でも継続していけるのが理想。発達に応じて内容を肉付けしていけるとよい。 ○　指導助言…中洲小　牛堀　隆弘　校長

	・　卒業生が来校した際，「中学校は楽しい」と言っている。安心して進学できる地元の中学校である。感謝でいっぱい。 ・　荒田小と中洲小が同じ様式で「卒業生実態調査」をとり，それを甲南中に渡せるとよい。 ・　それぞれの学校で長欠児童が多い。実態をしっかりとまとめ，中学校に繋いでいく事が大切。 ・　中１ギャップの中心は，「学習面」「友人関係」の２つである。その不安を取り払うことに小中連携の意義の一つがある。現状を知る，交流する，一貫した取組を行う。
C分科会…特別支援教育	①　個に応じた指導・支援について ・　自立活動はどんなものを行っているのか知りたい。また，効果についても併せて知りたい。情報交換の場があるとよい。 ・　特別支援教育支援員との連携の実態について知りたい。 ・　通常学級における配慮の必要な子どもが多く,指導が行き届かないのが現状である。 ・　職員により指導が異なるのではなく，個の実態をしっかりと共通理解し，同じ指導ができるように努めている。配慮が必要な児童が混乱しないように気を付けている。 ②　就学指導における共通理解 ・　特別支援学級在籍児の中学校からの進路の現状について知りたい。それが分かると小学校からの進路指導や保護者への説明もできる。 ⇒支援学校，城西高校，東高校が主な進学先である。 ・　中学校においては一般入試を受ける子どもの対応が難しい。保護者との合意が必要である。 ③　その他 ・　子どもの的確な実態を把握するために各校ではどんな取組を行っているか。 その子の困り感を把握する上で，職員間での意見交換は大切だが，専門家の目からの気づきは大きな参考となる。巡回相談，支援センター，放課後ディサービスなど，外部機関の活用は重要。連携を深めていきたい。 ・　職員同士で集まり，情報交換をしたいが時間がない。See-Smie を有効活用するなど，課題改善に努めたい。 ○　指導助言…荒田小　竹下　公博　校長 ・　支援計画に事実を残す。それを専門家に繋いでいく。 ・　将来の自立に繋げるためにどうするのか。今から何をしないといけないのか。インクルーシブ教育が大切。 ・ゴールを明確にし，選択肢を増やして，保護者との共通理解を大切にする。

5　成果と課題

（１）　成果

○　これまでは各学校の実態を述べる時間が多く，共通実践事項や連携して取り組むべきことに話し合いの時間が設けられなかったが，視点を明確にしたことと事前アンケートで各校の実態を知れたことで，深い話し合いを行うことができた。

○　授業を通した研修では，学力の二極化解消と主体的な学びの姿勢の育成を図ることに繋がる指導法の工夫について提案することができた。

○　三校の職員が顔を合わせ，意見交換，情報交換をする必要性を再確認することができた。授業見学や教員交流などを希望する声も聞かれ，意欲や熱意を感じた。

（２）　課題

●　学習や生活のきまりなど，各校で定めているものを持ち寄り，具体的に示すことで得るものはもっと大きかったのではと思う。口頭とレポートが主流の発表から，ＩＣＴ機器（タブレット）を活用したものへ転換するなど，よりよい手立てを工夫していきたい。

●　交流の場を望む声もあがったが，実行に移すことはできなかった。直接顔を合わせる場の設定は日程の設定等で難しさを感じる。学期１回の共通実践事項の進捗状況の報告会，校内研究授業案内等を通して，交流の場を設けることから始めていきたい。